

Bangladeshにおける持続可能な観光開発 —農村地域における観光開発の現状と課題—

研究代表者：阿閉 かすみ 神本 萌

共同研究者：天野 仁奈 内田 賀子 大槻 美奈 谷口 香澄
鳥谷 麻未 藤井 恵里香 森田 麻美

1. はじめに
2. Bangladeshの概要
3. Bangladeshの開発の現状
4. Bangladeshの観光の現状
5. 現地調査
6. 考察
7. おわりに

1. はじめに

Bangladeshは、BRICsに続く経済大国に発展する潜在性が高いとされているネクストイレブンの一国である。近年のBangladeshでは、観光に関しても、国の経済全体の発展に貢献し、雇用の創出をもたらすとして注目し、発展に力を入れている。

私たちは事前に文献調査を行ったうえで、Bangladeshの観光開発について現地調査を行った。特に観光開発の中でもマスツーリズムのような大規模な開発ではなく、観光資源や現地の歴史文化の保全にも配慮する持続可能な観光開発について調査を実施した。より具体的にはコミュニティ・ベースド・ツーリズム（Community-based Tourism、以下CBT）や農村観光のコンセプトにもとづき進められている観光開発の現場を訪ねた。現地では現地旅行会社JABA ツアーが企画したムンシゴンジ県でのホームステイ、タンガイル県で農民支援を行うUBINIGというNGOの観光部門を担うAJIYERのゲストハウスに宿泊しながらの農村観光などを体験した。また、JABA ツアーの経営者の方や青年海外協力隊としてBangladeshの政府観光局に配属されている隊員の方にインタビューを行った。

2. Bangladeshの概要

Bangladeshはインドの東側に位置し、インド洋に接する南アジアの国である。ダッカを首都とし、日本の約4割の面積を有し、人口は2013年3月現在1億5,250万人である。人口の大部分をベンガル人が占める。宗教は2001年の国勢調査によるとイスラーム教徒89.7%、ヒンズー教徒9.2%、仏教徒0.7%、キリスト教徒0.3%の割合である。熱帯モンスーン気候で、サイクロンや洪水の被害も多い。過去の主な災害では、例えば2009年5月25日、サイクロン・アイラがBangladeshに上陸し、Bangladesh南部を中心に被害をもたらした。サイクロンによる直接死は190人に上り、けが人は7,103人、50万人以上が家屋を失うという被害を受けている。主要産業は、衣料品・縫製品産業、農業である。縫製品に関し

ては、今日では日本のユニクロをはじめとする世界中の衣料ブランドが生産委託をしていることでも有名である。

3. バングラデシュの開発の現状

これまで援助はバングラデシュ経済の生命線であり、独立後から今に至るまで援助依存の状態にある。バングラデシュは独立後、国外からの支援が急増し、バングラデシュ人によるNGOも数多く誕生した。今後の課題としては、外国資金への依存、資金の偏りをなくすこと、住民の意識化による能力育成、NGOネットワークの強化などがあげられる（佐藤 1998）。しかし最近では、依存から自立へと向かう動きが活発化していて、その自立志向を高めるものとして特にフェアトレードやソーシャルビジネスが注目を集めている。

4. バングラデシュの観光の現状

(1) UNWTO（国連世界観光機関）のレポートより

バングラデシュの観光はまだ未発達な状況にある。その現状と課題については、2010年にUNWTOの調査団によるレポートが次のように解説している。まず、バングラデシュ経済においては、観光はとても小さな部門にすぎず、GDPの1.5%、雇用でも全体の1.2%を占めるにすぎない。国のイメージは自然災害、貧困、汚職などと結びつき、政府の観光軽視、資金不足、専門家不足、インフラの未整備など多くの課題が存在する。一方で、可能性については、バングラデシュの観光はある特定の外国人向けの市場には可能性が大きい。また、インドやネパール、ブータンなどの周辺国と連携した周遊観光、バングラデシュの近くにある陸地に囲まれた地域から休暇中に海や買い物のためにバングラデシュに観光に来るという可能性がある。このことから、バングラデシュの観光は多くの課題を抱えているが、発展の可能性がないわけではなく、十分な戦略をもってすればバングラデシュ独自の観光発展の可能性が存在するといえよう。

(2) National Tourism Policy (2010) より

バングラデシュにおいて観光の発展は雇用を生み出し、国の経済全体を発展させるために必要であると考えられている。その期待は年々高まり、より計画的で安定した観光発展のために、1992年に策定された観光政策は、2010年に改訂され、より詳しいものになった。以下、National Tourism Policy（「2010年観光政策」と表記）についてまとめる。

①観光政策の目的と目標

主な目的は発展的で持続可能な部門として観光産業を確立することであり、それは雇用の創出、地域住民と地方の政府組織を巻き込んだ社会経済の発展、生態系バランスの維持、生物多様性を守ることも通じる。観光とホスピタリティー産業を優先的産業とし、この部門に資金援助を行う。そして、統合的な開発プログラムを目指し、関連省庁や組織を関与させ、開発プログラムに観光産業を組み込み、民間部門とも連携して観光産業の発展を目指す。

②観光政策実施のイニシアチブ

うへの目的にもとづき、以下の措置がとられる。ここでは、Tourism Policyの中から主要

なポイントについて列挙する。

- i 観光サービスの質を保証するため、法律を制定する。
- ii ツーリストによる選択を踏まえたツーリスト・ゾーンの画定とアトラクションの選定を継続し、潜在的観光地・自然を保護するために、民間観光地のリストアップを行い、それらを政府の管轄下に置く。
- iii 地方政府を巻き込む
- v 省庁間の連携により、民間投資の呼び込みや、多角的な観光産業の育成をはかる。
- vi シュンドルボンでのエコ・ツーリズムを開発する。
- vii 潜在的な観光地に政府が初期投資を行う。
- ix ハンドクラフトなど文化的特徴が反映されたみやげものをつくる。また少数民族の観光資源保存に対する意識を醸成するために、トレーニングを行う。特に各民族集団の若者を対象に行い、数か国語が話せるツアーガイドを養成する。
- x 国際、国内、地方のレベルに細分化されたマスタープランのもとに、短・中・長期的プログラムが実施される。そのためには道路、鉄道、水路、航空路などインフラの整備が必要である。

③コミュニティ・ベースド・ツーリズム (CBT) について

近年、バングラデシュにおいても CBT に対する関心が高まっている。例えば、2014 年に開催されたバングラデシュ観光局主催のセミナーにおいて、ダッカ大学観光・ホスピタリティ・マネジメント学科のハサン教授は次のように述べている (Hasan and Islam 2014)。

CBT はローカル・コミュニティを巻き込む特別な観光である。コミュニティのメンバーによって考えられた CBT のプログラムは彼らが誇りに思い快適さを感じる文化や自然といった地域の生活の特別なものを観光客と共有することが基本となっている。また、CBT は観光客に満足感を与え、ローカル・コミュニティの生計の改善に貢献しながら、自然・文化資源を守ることを助け、持続可能な開発を保証する。ローカル・コミュニティの人々は CBT を通じて収入、新たなスキルや知識、健全な環境などの恩恵を受ける。

このように CBT は観光客に質の高い観光を提供しながら、コミュニティの人々にも大きな恩恵が得られるものと考えられている。バングラデシュで CBT は貧困を緩和し、農村部の人の社会経済的な生活を変えることができると期待されているのである。このことから、以下の通り、2010 年観光政策においても主要な観光開発項目のひとつとして CBT が挙げられている。

観光資源の保全と観光客の安全の確保が、観光地の地元の文化的実践家 (cultural activists) によってなされなくてはならない。委員会を地域で結成して、魅力的な催しを催行するべきである。そのことで、国内・国外観光客の娯楽のためのプログラムをつくることも促進されるだろう。外国人観光客のための「コミュニティ・ホームステイ・オペレーション」がアレンジされたら、地元の文化的実践家のための雇用が生み出されるだろう。また、地元のコミュニティと政府機関はコミュニティ・ツーリズムとその運営に統合されるべきである。短・中・長期のプログラムと政府の開発プロジェクトは、各少数民族の若者に訓練課程を提供することによって、数か国語を話すツアーガイドを養成することを目指してなされるべきである。

5. 現地調査

(1) ムンシゴンジ県でのホームステイ

今回の現地調査の前半では、現地の JABA ツアーというツアーオペレーターを利用し、この業者の手配で農村ホームステイを体験した。

JABA ツアーのプランは、サリーの着付けなど極力私たちのリクエストに対応してくれていた。また、漁港や銀細工工房・壺作りの村へ訪問し、人々の生活の様子を実際に見ることができた。

会社の設立者であるアラム氏は、旅行業以外にも私立小学校の建設、チャリティーにも積極的に参加し数多くの賞をうけている。以下、アラム氏へのインタビューによる。

JABA ツアーを始めたとき、旅行業のノウハウが無かった。だが、そのおかげで固定概念にとらわれることなく新しいアイデアを出すことができたし、ノウハウよりも客の要求やアドバイスを受けながら、客と考えながら旅行内容を考えるというパターンができた。

バングラデシュにとって観光の仕事は新しく、仕事という概念がなかった。バングラデシュは国として新しくその幼さが売りであり、人工的に作られたものが少なく素朴な感じも売りになっている。

観光はバングラデシュにとって大きな資源となっている。観光のおかげで仕事と交流ができている。さらに、私たちは訪れる人からいろいろなことが学べるのでこれ以上いい仕事はない。

ホームステイに関しては、現在ホームステイを受け入れているのは、ムンシゴンジ県とジョシヨール県と、ガンジス川のほうにあるロホジョン県 (Lohajang UZ/Munshiganj) というところで、ロホジョンはアラム氏の親戚の家である。信用と安全が一番なので、きちんとした食事がとれ、清潔感のある所でしか受け入れをしない。ホストファミリーに渡すお金は、時と場合にもよるが、1人当たり1日大体30ドル。心を込めてサービスしてもらうため、平均よりも少し高い水準で渡している。

ムンシゴンジ県では1997年からホームステイを受け入れている。年間に5～6グループぐらい受け入れている。1人で来る人もあわせると全部で10組程度。グループで来るのはだいたい学生である。アラム氏はホームステイを大量に受け入れないので、頼まれても断ることがある。JABA ツアーは大量の客に来てもらうことよりも、自分たちと客とで一緒に考えながらツアーを考える。ジョシヨール県は年間8～10組で、毎年来るグループもあって、年に1,2回来る。宿泊数は3泊4日とか2泊3日が多いが、ムンシゴンジはダッカからあまり離れていないため1泊や日帰りのグループもある。

(2) タンガイル県での農村滞在とスタディー・ツアー

タンガイル県にあるUBINIGというNGOのセンターに泊まった。センター近くの朝市、種子バンクや機織りの工房などの見学を行った。UBINIGは米などの作物の在来種の登録・保管を進めていて、地域の農民も巻き込んで在来種の種子バンクを運営している。農民は植え付け時には種子を引き出し、収穫後には余分な種子を預けることで継続的に在来種の利用が可能となっている。これによって、農民は資本が必要な近代農業に依存することなく、持続可能な農業を維持できている。また、機織り職人については、糸の仕入れ代金などの補助を行うことで、高利貸しへの依存が生じないようにしている。実際の現場を視察することで、UBINIGが行っている活動について深く理解することができた。ここでは、長年に渡って農

村地域で農民支援や機織り職人支援を行ってきたNGOが受け入れ先となり、その活動を視察できたので、農村の景観や生活の様子を体験すること以外にも、スタディー・ツアーとしての体験もすることができた点が、ムンシゴンジ県とは大きく異なっていた。

(3) 青年海外協力隊隊員へのインタビュー

青年海外協力隊として Bangladesh の政府観光局に配属されている川島史織さんにお話を伺った。Bangladesh では観光も期待の分野ではあるが、行政の現場ではむずかしいこともあるようだ。例えば、観光局では、フェイスブックで随時情報を更新できるようにしたが、観光局のスタッフがやってくれないと配属期間が終わった後、更新ができなくなるため仕事として割り振っているが、本人にとってみれば仕事を増やされたただけであった。本人がやりたいと思わないと意味がないのに、強制的に割り振って意味があるのかということを考えて伺った。

Bangladesh の観光の強みは、人の良さであることもうかがった。Bangladesh の観光地をわざわざもう一度訪れようとは思わないが、Bangladesh で知り合った人にもう一度会いたいと思わせることができる人の良さが Bangladesh にはあるのである。

6. 考察

(1) 魅力、可能性

今回の調査を通じて、Bangladesh では都市観光や遺跡観光での発展よりも、Bangladesh の普通の生活を体験できる農村観光に可能性があると感じた。歴史遺産などでは、近隣のインドには対抗できないが、このニッチな市場を狙うことで観光発展の可能性はある。また実際に人々と接したことで、Bangladesh にある貧困などのマイナスイメージに反して、人々はとてもほがらかで友好的であり、人が良いということが分かった。これをプラスイメージとしてアピール、活用していくべきではないかと感じた。

また日本では感じるできないことを Bangladesh の農村部では体感できる。例えば、Bangladesh の農村では人間と動物（山羊、牛、鶏、あひるなど）が共存している。イスラーム教、民族衣装、食文化（ベンガル料理）などは私たちにとってとても珍しいものであった。ホームステイ先の家族や UBINIG の農民との歌や踊りの交歓会も日本では体験できないことだった。

(2) 現状、課題

Bangladesh の CBT（農村観光）には可能性があるが、まだまだ課題はある。農村部の道路状況が悪い。トイレやお風呂などのアメニティ面の整備がまだできていないという課題が明らかになった。食事を手で食べるという異文化や異なった習慣についていけないという意見もあった。

また、Bangladesh 政府観光局は CBT で観光産業を発展させようとしているが、施策の立案もまだできない段階である。現状としては、JABA ツアーのようなツアーオペレーターや UBINIG のような団体が独自の取り組みとして催行しているにすぎない。これらも CBT といいながら、地域住民を十分に巻き込んでいるとは言えない段階である。また、政情が安定しておらずストライキが頻発するために、予定通りに観光できない現状も改善が必要である。

7. おわりに

私たちがバングラデシュのCBT（農村観光）の実体験を通じて、バングラデシュの農村部が独自の観光資源としての魅力を備えていることがわかった。史跡を見て回る観光ではなく日本にはないバングラデシュの地域に根ざした文化やバングラデシュの人々の温かみがバングラデシュの観光資源になると考える。今後は、地域住民の人々にも恩恵が及ぶような枠組みを整えていくことが重要である。

参考文献

佐藤寛編（1998）『開発援助とバングラデシュ』アジア経済研究所

Hasan, Syed Rashidul and Md. Saiful Islam (2014) 'Community-Based Tourism for Socio-Economic Development: Bangladesh Perspective', a paper for the seminar organized by Bangladesh Parjatan Corporation on 27 September 2014 at Hotel Abakash Banquet Hall, Bangladesh.

National Tourism Policy 2010 (Bangladesh Parjatan Corporation より入手)

World Tourism Organization (2010) UNWTO Mission Report: Sustainable Tourism Development - A Proposed Way Forward, World Tourism Organization.